

[制作記録]

## 空目金について

原 智

金属工芸の中でもその有機的かつ神秘的な美しさで人々を魅了し続ける技法に空目金がある。江戸時代初期に秋田県の刀装具職人であった正阿弥伝兵衛（しょうあみでんべい）により考案されたと伝えられている。近年では日本のみならず海外でも「MOKUMEGANE」として呼称される金属技法である。国内外での研究は様々な角度から行われ、素材並びに技術に於いて現在も進化を続けている。

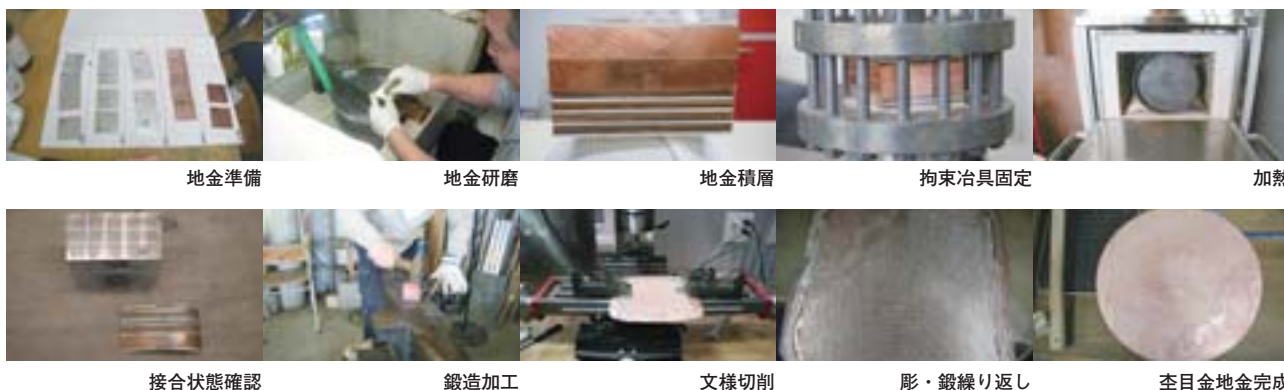
空目金技法について端的に述べると、「異なる金属板を複数枚積層接合し、彫金技法による彫り加工と鍛金技法である鍛造加工を交互に繰り返し自然木の木目に似た文様を金属で表現すること」である。地金として用いるのは、銅、赤銅、黒味銅、真鍮など銅合金や、970銀、四分一など銀合金を中心に使用する。これらの金属は着色技法を施す事により、無機質な金属に美的な光沢と色味を与えることになる。元来日本の金属工芸は色金の文化ともいえる。高温多湿のこの国の気候は、金属に対して酸化・硫化を起こしやすい状況にある。その金属にとって望ましくない状況を積極的に取り入れ、着色技法として確立し美的要素を抽出したのが日本の金属文化といえよう。空目金技法はこの着色技法により最大限

の魅力を発揮することができる。

複数枚積層した地金を、お互いに接合するには大別して二通りの方法が挙げられる。一つは融点の異なる金属を互い違いに重ねあわせ、融点の低い金属を溶かし接合する方法、いわゆるリキッド接合と、金属素材を溶かさずに接合界面に現れる金属拡散現象を利用して接合するソリッド接合となる。自身の制作では後者のソリッド接合を中心に研究を行っている。その利点は金属の積層する組み合わせの自由度が高いことと、四分一などの極端に融点の差が大きい金属も取り入れることが可能であることといえる。拡散接合に関する実験では拡散接合理論の権威である大橋修氏より理論指導を受けそれに準じて行った。

空目金は地金として非常に魅力的である。組み合わせる色金や文様の出し方によって未知数の可能性を持つ素材でもある。ただ重要なことはこの素材を使って作り手が何を表現するのか、どのように時代性をもった作品として昇華させるかであろう。そのことは今後も持続する課題である。

以下の写真は拡散接合の工程と文様制作工程を掲載した物である。（はら・さとし 工芸／金工）





鍛金杳目金香炉「亀」



杳目金花器「浮」



杳目金香炉「翡翠」



杳目金花器



杳目金香炉「波紋」